

# 會津八一記念博物館の課題と展望

塚 原 史

私たちの早稲田大学會津八一記念博物館（以下本学所定の英語名称に従い Aizu Museum と記す）は1998年創設であり、2017年度が満20年の区切りとなる。創立20周年の行事などは来年度に予定されているが、本稿では一足早く、Aizu Museum の過去を振り返りつつ、現状の課題と今後の展望について手みじかに述べておきたい。

## 1. University Museum としての Aizu Museum の現況

まず初めに、Aizu Museum 開館に当たっては、元館長大橋一章先生がこう述べておられたことを思い出しておこう——「會津〔八一〕が早稲田大学ではじめて博物館の設置を提唱してから、すでに70年以上の月日経った。かつての會津の思いをいくらかでも活かした博物館が、會津が新築の図書館と同じくらいの大きさといった今井兼次設計の旧図書館（2号館）を再生して開館することになった。感慨ひとしおである」（当館 HP 参照）。

20年後の今日なお、私たちはこの感慨を共有するものであり、「実物尊重の学風」を唱えて「どれ程理論が立派に出来上がって居ても何所かに、実物を根底にする真実性が含まれて居なければ、即ちそれは空論だ、空学だ」（同上 HP）と、すでに1926年に強調していた會津八一の信念に基づいて設立された Aizu Museum は、まさに University Museum にふさわしい性格を備えているといっていよう。

各国の主要大学は充実した Museum（美術館・博物館）を有し、その存在と活動が大学の学術的社会的評価に貢献していることはよく知られている通りである。それらの多くはハーヴァード大学（Fogg, Busch-Reisinger, and Arthur M. Sackler Museums）の場合のように、卒業生や寄付者・寄贈者の名を冠しており、早稲田大学でも、当館はもちろん坪内逍遙博士記念演劇博物館も開設のきっかけとなった先達にちなんだ名称である。そのこと自体は大学の学問・文化の伝統を同時代の人々ばかりでなく、はるか後世に伝えるという大きな意味があるが（演劇博物館は創立九十周年を迎える）、他方、名称がミュージアムの方向性がある程度限定する傾向もないわけではない。

Aizu Museum は、東洋美術、近代美術、考古・民族（俗）学を主要な対象領域として2万点を越える作品・資料を収蔵する博物館であり、館内には毎日数万の学生が行き交う学園には数少ない静謐な空間が広がり、横山大観・下村観山共作「明暗」、前田青邨「羅馬使節」、シカゴ万博出展執金剛像、そして會津八一コレクションの中国の明器や八一自身の書など、常設展示の名品の数々が来館者を迎えてくれることは周知の通りである（他に富岡コレクション展示室を設置）。そのことをひとまず確認した上で、年に数回開催される企画展に目を移すと、そこでは縄文式土器から日本の近現代美術まで、時空を超えるハイブリッドな展示

に出会うことができる。

これらの企画展は、当館の展示が會津八一所蔵の中国の古美術品を中心とする「會津コレクション」から始まったこともあり、当初は東洋美術に重点が置かれた感があったが、近年では、荒川修作展、ル・コルビュジェ展、「パリから学んだ画家たち」展など、近現代美術（モダンアート）系の企画が少しずつ増加しており、私自身、「會津博物館でアラカワ展ですか」と美術関係者に驚かれたことがあった。とはいえ、Aizu Museum の創立理念が前述の「実物尊重の学風」に基づいている以上、「実物」の範囲は時代とともに広がるから、20世紀美術を学ぶ学生たちにとっては「アラカワ」もまた「実物」なのである。こうした方向性から注目されるのが、2017年度前期に開催された上記「パリから学んだ画家たち——岡鹿之助から嶋田しづまで」展である。同展は、本学文学学術院の坂上桂子教授が企画され、ゼミの院生たちが図録執筆から展覧会運営まで積極的に協力したユニークな展覧会であり、期間中の来場者数は過去5年ほどで最多の6,800名に達した。

このように「実物尊重」の現代化が進んでいることもあり、当館の来館者数は数年前の年間1万数千人数から4万数千人数へと着実に増加している。今後は、東洋美術、考古・民族（俗）学、近現代美術のバランスの取れた収蔵展示にいっそう力を入れて取り組むことが望まれる（入館者数等は文末資料参照）。

## 2. ルーヴルのマネと「実物尊重」

ところで、古典的な収蔵品で知られる美術館でも、同時代の作品を展示することで新たな視野を開く企画を試みることは決して少なくない。その一例が、1907年にパリのルーヴル美術館でマネの『オランピア』が展示された事件である。「事件」とはやや大袈裟な表現かもしれないが、あの大ルーヴルにアングルの『グランド・オダリスク』（1814年）と並んでマネの『オランピア』（1863年）が展示されたのだから、「事件」には違いなかった。

この出来事については、マルセル・ブルーストが『失われた時を求めて』第三巻「ゲルマンのほう」で物語の一節として記述していた——「先日も、ロシアの大公妃さまとルーヴルに参りまして、マネの『オランピア』のそばを通りかかりました。今ではあの画なんかに驚く者はだれひとりいません。アングルの作に見えますからね！」（吉川一義訳）。この個所は、パリ社交界の中心人物ゲルマン侯爵夫人の言葉だが、同じ巻で「私」が語る次の芸術論を反映している——「最年長の人たちが自分の生涯をふり返ってみれば〔…〕、アングルの傑作〔1814年の『グランド・オダリスク』〕と高く評価していた画と、永久におぞましい作にとどまりつづけると思われた画（たとえばマネの『オランピア』）とのあいだの越えがたい距離がしだいに減少し、ついには2点の画が非常に似て見えることに気づいたのであろう」（同上）。

アングルもマネも、どちらも若い女性がヌードで横たわり、顔を上げてこちらを見ている構図だが（マネは黒人の侍女も描いている）、1863年の『オランピア』が娼婦の裸体を宗教や歴史上のエピソードから切り離してなまなましく描いたとされ、政府公認の官展に展示された直後から非難を浴び続けたことは、よく知られているとおりだ。ところがその数十年後には、ブルーストがゲルマン侯爵夫人に語らせているように「いまではあの画なんかに驚く者」は誰もいないという状況が訪れたことを、『失われた時』の作家は強調

していた。ここで問題になるのは「今では」とはいつ頃のことか、である。というのも、物語の設定としては19世紀末になるはずだが、『オランピア』がルーヴル美術館で『グランド・オダリスク』とともに展示されたのは、実は1907年だったからだ（邦訳引用は『失われた時を求めて』第三篇「ゲルマンのほうⅢ」、吉川一義訳、岩波文庫。〔 〕内、下線は筆者。吉川氏による詳細な注釈参照）。

1907年といえば、ピカソがやはり裸体の群像『アヴィニョンの娘たち』を発表してキュビズムの時代の幕開けを告げた年であり、この年に、マネをめぐって今ではあまり語られない出来事が、モダンアートを専門とするわけではないルーヴル美術館で起こっていたことは、ある意味で「実物尊重の学風」を同時代の芸術作品に適用した実例ともいえそうある。

### 3. 課題と展望

以上のような現状から、今後改善すべき重点課題としてはおよそ次の諸点が挙げられるだろう

- (1) 在学生の入館者が意外に少ないこと。本部キャンパス内の大学博物館ではあるが、早稲田の学生は年間入場者数の二割以下との推計もある。戸山、理工、所沢キャンパスから附属係属校も含めて全在校生が卒業までに数回は足を運んで貰えるよう、Aizu Museumとしても魅力ある企画を構想していきたいので、各学部・学校の先生方のさらなるご協力をお願いしたい。
- (2) 国際対応が遅れていること。近年、アジア、アメリカ、ヨーロッパ諸国など海外からの訪問者が増加の一途をたどっているにもかかわらず、英語をはじめとする外国語対応は現状では必ずしも十分ではない。今後は、いっそうの改善を図りたい。併せてバリアフリー化もぜひ実現したいものである。
- (3) 長期間勤務可能な学芸員がいないこと。現状では、東洋美術、近代美術、考古民族（俗）学の助手3名が学芸員資格を有しているが、任期が延長の場合を含めて最長3年であり、中・長期に渡る展示収蔵計画を策定し難い。この問題は私たちの博物館だけでは解決できないが、学内各位のご理解が得られれば幸いである。

ルーヴルの話に戻るが、じつはピカソがこの伝統美術の殿堂で展示されたことがあった。第二次世界大戦後間もなく、ピカソはパリの近代美術館館長ジャン・カースの要請を受けて数点の絵画を寄贈したが、その返礼として、フランス国立美術館協会会長ジョルジュ・サルは、それらの作品を近代美術館に先立ってルーヴル美術館で公開したのだった（次の文献を参照：Arianna Stassinopoulos Huffington, *Picasso, Creator and Destroyer*, 1988）。ピカソといえば、私たちの Aizu Museum でも2016年のチューリッヒ・ダダ百周年特集企画に、ダダイスト、ツァラとの詩画集『人間の記憶の限り』中のリトグラフを公開しているのだが、創立30周年を迎える頃にはピカソの絵画を展示できるような Art Museum に発展していることを切に願っている。

（早稲田大学會津八一記念博物館館長）

【資料】（博物館事務所提供）

＊近年の主要企画展・特集展示（2012-2017年度 富岡展示室を除く）

2017年度 前期：富田万里子コレクション長崎版画展、「パリから学んだ画家たち—岡鹿之助から嶋田しづまで」展  
／後期：「アフリカ横断一万軒（キロ）—関根吉郎とアフリカ・マヤ資料コレクション」展、「狩谷椋斎墓碑受贈  
記念 狩谷椋斎—学業とその人」展

2016年度 前期：「ル・コルビュジエ ロンシャンの丘との対話」展—ル・コルビュジエの現場での息吹・吉阪隆正  
が学んだもの、「チューリッヒ・ダダ100周年—ダダイスト・ツァラの軌跡と荒川修作」（特集展示）／後期：「殿  
塚・姫塚古墳発掘60周年記念 甦る九十九里の埴輪群像」展、「安藤更生コレクション受贈記念 會津八一と安藤  
更生—學藝の継承—」展

2015年度 前期：「難波田龍起・史男の世界」展、没後50年「写真家としてのル・コルビュジエ」展／後期：「ゴヤ銅  
版画集〈妄〉—人間の不条理—」展、「早稲田大学エジプト調査 50年のあゆみ」展、

2014年度 前期：「北蓮蔵 渡欧期の肖像画」展、「荒川修作の軌跡—天命反転、その先へ」展／後期：「早稲田のな  
かの韓国美術」展／「奈良・日吉館と會津八一」展

2013年度 前期：「花岡萬舟 戦争画の相貌Ⅱ」展／後期：「池部政次コレクションの中国明清の書画」展

2012年度 前期：「絵をよむ言葉 美術批評家 坂崎坦・坂崎乙郎のあつめた絵画」展／後期：「早稲田をめぐる画家  
たちの物語 小泉清・内田巖・曾宮一念・中村彝」展

＊入館者数一覧（2012年4月1日～2018年1月31日）

2012年度 13,403人／2013年度 16,507人／2014年度 17,750人／2015年度 30,221人／2016年度 48,203人

2017年 4. 1～2018. 1. 31. 41,497人（2016年4月～入館者カウンター導入）

＊企画展上位入場者数（2012-2017年）

1 / 6,871人（2017）パリから学んだ画家たち—岡鹿之助から嶋田しづまで

2 / 6,184人（2016）ル・コルビュジエ ロンシャンの丘との対話

3 / 5,149人（2015）写真家としてのル・コルビュジエ

4 / 4,774人（2012）早稲田をめぐる画家たちの物語

5 / 4,260人（2017）アフリカ横断一万軒—関根吉郎とアフリカ・マヤ資料コレクション

6 / 4,146人（2016）殿塚・姫塚古墳発掘60周年記念 甦る九十九里の埴輪群像

7 / 3,974人（2013）花岡萬舟 戦争画の相貌Ⅱ

8 / 3,876人（2015）日吉館をめぐる文化人 —會津八一と奈良—

9 / 3,785人（2013）池部政次コレクションの中国明清の書画

10 / 3,630人（2012）絵を読む言葉 美術批評家、坂崎坦・坂崎乙郎のあつめた絵画

（各企画展は開催日数が異なる。入館者数には8月初旬オープンキャンパス来場者を含む）